古代文字資料館発行『KOTONOHA』第93号（2010年8月）

＜カアンなる我らがおおせ＞について

中村雅之

1．＜我らがおおせ＞とは何か？

13～14世紀のモンゴル時代の皇帝命令文（聖旨）には、冒頭に、

［1］とこしえの天の力において

［2］大いなる威福の輝きの加護において

［3］カアンなる我らがおおせ

として知られる定型句が用いられる。初期には若干のバリエーションがあったが、クビライ以降ほぼ定式化した。なお、上の日本語訳は中村・松川（1993：16）によるが、他の研究者の訳もほぼ同じである。

ところで、この日本語訳は意味が十分に明瞭とは言いがたい。とりわけ＜カアンなる我らがおおせ＞は通常の日本語としては意味不明である。＜我ら＞とは誰なのか。おそらくモンゴル時代のことを扱い慣れている研究者には違和感がないのであろうが、何の前提もなくこの日本語を読む者には理解不能である。

＜カアンなる我らがおおせ＞と訳されたモンゴル語は、中村・松川（1993）で紹介されたウイグル文字資料では＜qaγan ǰrlγ manu＞、そして多数存在するパスパ文字資料では＜qān ǰarliq manu＞と記される。したがって逐語的には＜カアン、おおせ、我らの＞となる。＜我らがおおせ＞という日本語からは、あたかも＜我ら＞が聖旨の読み手たちを指すかのような印象を与えるが、そのような解釈は許されない。なぜならモンゴル語＜manu＞は話し相手（聞き手）を含まない形式、いわゆる排除形（exclusive）の一人称複数属格であって、話し相手を含む包括形（inclusive）の一人称複数属格＜bidanu＞と対立しているからである。この対立がどの程度厳密なものであったか否かについては検討の余地があるものの、いま問題としている定型句についてはすべて＜manu＞が用いられ、＜bidanu＞は決して用いられない。それ故、ここでの＜manu＞には聖旨の読み手は含まれないと解釈すべきである。

それでは、ここでの＜manu＞は何かというと、書記官による敬語表現と見なすのが最も妥当ではなかろうか。本来は、カアンの立場からすれば、カアン自身が発する命令は＜ǰarliγ minu（私の聖旨）＞あるいは＜qaγan ǰarliγ minu（私の皇帝聖旨）＞で十分である（いま便宜的に文語形を用いる。以下同）。しかし、それを書記官が文書にするにあたって、敬語表現としての複数形を用いた。実際には単数であるにもかかわら

ず、敬語表現として形式的に複数形を用いたのである。そのように考えれば、包括形の＜bidanu＞ではなく、排除形の＜manu＞が用いられたことも容易に理解されよう。実際の意味が＜私の＞である以上、包括形は不適当である。

＜manu＞が実質的に＜私の＞であって、＜我々宮廷の＞というような漠然とした意味でないことは、過去のカアンたちの聖旨に対して＜manu＞が付されないことからも明らかである。また、文章の末尾において、聖旨がいつどこで書かれたかを記す時に＜ǰarliγ＞の後に＜manu＞が付されるのも、他の聖旨ではなく＜私のこの聖旨＞を問題にしているからであろう。

要するに、＜カアンなる我らがおおせ＞と訳されてきたこの定型句の実際の意味は＜カアンである私の言葉＞ということになる。

2. 中期モンゴル語の敬語表現

複数形を敬語表現として用いることは、中期モンゴル語において頻繁に見られる。例えば、過去形語尾は主語の性数によって男性形「ba/be」、女性形「bi」、複数形「bai/bei」という形をとるが、複数形はしばしば敬語として単数の主語に対しても用いられた。小澤重男（1997：43-44）は「Čingis qaɢān J̌ürkin-dür morilabai.（チンギス可汗はヂュルキン族に出馬した）」という例を挙げて、「morilabaiの主体はチンギス可汗で、チンギス可汗の行う行動には『元朝秘史』では総て敬語形が用いられる」という。

さらに、聖旨をはじめ各種命令文は、いつどこで書かれたかを末尾に述べるのが通例であるが、その定式は「J̌arliγ manu」で始まり「bičibei（書いた）」で終わる。聖旨を書いたのが現実には書記官であるにせよ、論理的にはその主体はカアンである。したがって、「bičibei（書いた）」のように過去形語尾が「-bei」と複数形になっているのは、小澤重男（1962：23）がすでに指摘したように、カアンに対する敬語表現にほかならない。ちょうど「J̌arliγ manu」の「manu」が敬語形であるのと呼応している。カアン本人が書くとすれば、「J̌arliγ minu.....bičibe（私の聖旨は・・・［いつ、どこで］・・・書いた）」となる筈であるが、書記官によって文書が作成される際に、敬語法を用いた定型表現として複数形の「manu」と「bičibei」が用いられたわけである。

本来、一人称に対する敬語表現というのは論理的に成り立ちにくいはずである。しかし、皇帝聖旨（および令旨、懿旨、法旨など）においては、命令を発する本人とは別の者（書記官）が文章を書くことから、敬語表現が生じる余地があったと考えられる。また、船田善之（2005：38）によれば、「命令文書は使臣の手によって発令先まで送達され、各官府の人員や宗教関係者などの発令対象者は、規定にそって、使臣を出迎

え、命令文書を受領し、それが開読されるのを聴いた」という。命令文書は「開読」すなわち「開封して宣読」されたのである。つまり聖旨などの命令文書は、発令者と発令対象者の間に、書き手たる書記官のほかに文書を読み上げる役人が介在した。それらの介在者にとって、発令者に対する敬語表現を用いるのは自然なことであろう。

3. 仏訳など

Mostaert&Cleaves（1952：434-436）には、イル・ハン朝のアバガによる発令文（13世紀後半）の冒頭の一句＜[Abaγ-]a üge manu＞と、それに類似する定型句についてのコメントが詳しく記されている。その定型句の仏訳は＜Parole de nous, Abaγa＞となっており、＜nous＞と＜Abaγa＞とは同格であるという。一人の人物＜Abaγa＞と一人称複数の代名詞＜nous＞が同格だというのであるから、この場合の＜nous＞は実際には単数の＜私＞でなければつじつまが合わない。つまり、ここでも敬語表現のようなものを想定しているのではないかと思われるのであるが、そのような具体的な説明は見られない。ただし類似表現＜Arγun üge manu＞に対するアベル・レミュザの訳＜Paroles de moi Argoun＞を、「正確な訳（une traduction correcte）」と評して紹介しているから、モンゴル語＜manu＞が形式的には複数でありながら、実際には単数の＜私（moi）＞を意図していることは認めていることになる。

Cleaves（1965）では、ウイグル文字モンゴル語による1340年の雲南王アルグの令旨が扱われているが、冒頭の三行

[1] tngri-yin küčün-dür

[2] qaγan-u suu-dur

[3] Aruγ Ün nam ong üge manu［以下省略］

に対する、英訳は次の通りである。

[1] In the Might of Heaven.

[2] In the Fortune of the Qaγan.

[3] Word of Us, *Ün nam ong* (*Yün-nan Wang*), Aruγ. [...]

仏訳と同様の方式で、＜Us＞と＜Aruγ＞を同格と見なしているようである。

山西省玄中寺のパスパ文字皇帝聖旨を扱った小澤重男（1962：23）は、冒頭の定型句の問題の箇所を、「可汗なる我が詔勅（は）」と訳している。また、末尾の部分も、「我が詔勅をば、丑の年の睦月二十五日、大都にある時に記せり」と訳す。＜manu＞を＜我が＞と単数で訳したのはさすがであるが、それについての説明はない。

4．＜ba＞と＜bi＞

中村・松川（1993：65）では、1253年のモンケ聖旨において、カアンが自らを＜ba（一人称複数代名詞：排除形主格）＞と称していることに触れ、「baという複数形をもって皇帝一人を表しているのだろうか」と述べる。この場合も、書記官による敬語表現としての複数形と見るべきであろう。

亦隣真（1982）は、「皇帝・諸王と官員のモンゴル語の第一人称は常に複数形を用いる（皇帝、諸王和官員的蒙古語第一人称常用複数）」と述べる。しかし、皇帝や皇族たち本人が自称として一人称複数（ba/manuなど）を用いたとは考えられない。あくまでも書記官による文書作成上の措置と捉えるべきである。例えば、上に挙げた雲南王アルグの令旨において、アルグ自身は自らを＜ba＞ではなく、＜bi（私）＞と称している。この場合は、書記官が敬語表現としての＜ba＞を採用しなかったために、本来の＜bi＞がそのまま用いられているのである。＜ǰarliγ　manu＞や＜üge　manu＞のような定型句においては、それが定式であるが故に全て＜manu＞となっているが、文中における自称を＜bi＞とするか＜ba＞とするかは、書記官の判断によったことになる。あるいは、カアンについては＜ba＞、皇族以下については＜bi＞というような区別が設けられていたのかも知れないが、これについてはなお調査を要する。

5．漢訳など

蒙漢合璧碑文において、冒頭の定型句＜qaγan ǰarliγ　manu＞の漢訳はすべて＜皇帝聖旨＞であり、＜manu＞の部分は訳されない。末尾の発令時期・発令地を記す部分の＜ǰarliγ　manu＞については、多くが単に＜聖旨＞であるが、＜聖旨俺毎底＞や＜聖旨俺的＞として＜manu＞の部分を訳すものもある。この場合、＜聖旨＞の後に＜俺毎底＞や＜俺的＞を続けるのは、いわゆる蒙文直訳体であって、通常の漢語の語法から逸脱している。本来の意味からすれば、＜ǰarliγ　manu＞の漢訳として最も自然なのは＜我的聖旨＞であろうが、そのように訳されたものはないようである。

杉山正明（1990）には、1240年代のコデン太子の三通の令旨などが紹介されている。漢文のみであるが、命令文が定式化されるクビライ以前の資料として貴重である。その最初の一通の文中に「如／你毎／我底令旨不肯聴従時分…」（いまスラッシュで改行を示し、抬頭は無視した）という部分があり、杉山氏の訳は「もし／おまえたちが／われらのことばに従おうとしない時は…」である。杉山氏は原文の「我」にわざわざアステリスクを付して注意を喚起しており、その部分を「われら」と訳している。つまり、この部分

のモンゴル語原文に＜üge manu＞のようなものを想定し、その＜manu＞を＜われらの＞と訳したのである。しかし、これは些か訳しすぎの印象を受ける。たとえモンゴル語原文が＜üge manu＞であったとしても、それが＜私のことば＞の意であることは漢訳の＜我底令旨＞から明らかである。にもかかわらず、現存しないモンゴル語原文からの「直訳体日本語」で＜われらのことば＞という訳を与えたのは、モンゴル研究者の間で＜manu＞を＜われらの＞と直訳する習慣がいかに根深いかを示している。。

漢訳において＜聖旨俺毎底＞＜聖旨俺的＞＜令旨俺的＞＜懿旨俺的＞のような、統語的にも意味的にも破格というべき直訳体が用いられるのはクビライ以降であり、それ以前にはコデン太子の令旨が示すように、＜manu＞が適切に＜わたしの（我底）＞と訳されたこともあった。「適切に」とは、モンゴル語の語順や敬語法に引きずられて不自然な漢語になることなしに、ということである。＜聖旨俺毎底＞等の漢訳は明らかにそのような適切さを欠いているが、それは意図的な蒙文直訳体の実践というある種の政策であるから、言語学的な批判の対象ではない。しかし、現在一般化している日本語訳＜カアンなる我らがおおせ＞は、歴史的な文書の解釈という面から見る時、翻訳としての適切さを欠いているように思えてならない。

＜参考文献（発行年順）＞

Mostaert,A. & Cleaves,F.W.(1952)“Trois documents mongols des Archives Secrètes Vaticanes”, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 15: 419-506.

小澤重男(1962)「山西省交城県石壁山玄中寺の八思巴文字蒙古語碑文の解読」『東京外国語大学論集』9: 9-33.

Cleaves,F.W.(1965)“The Lingji of Aruγ of 1340”, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 25: 31-79＋1pl.

亦隣真(1982)「元代硬訳公牘文体」『元史論叢』1: 165-178.

杉山正明(1990)「草堂寺闊端太子令旨碑の訳注」『史窓』47: 87-106＋2pls.

中村淳・松川節(1993)「新発現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8: 1-92＋8pls.

小澤重男(1997)『蒙古語文語文法講義』, 大学書林.

舩田善之(2005)「元代の命令文書の開読について」『東洋史研究』63-4: 36-67.